

【研修参加学生の報告書から】海外研修基礎コース in 東南アジア

・この研修を通じて、今まで考えてこなかったことや見てこなかったものに触れるという経験をした。第一に、美術館で作品を鑑賞する機会が多かったが、美術館が単なる人集めのものではなく、国のアイデンティティを確立する役目を果たしているということを学んだ。第二に、戦争の資料館に行く機会も多く、日本軍による攻撃を受けたシンガポールの歴史資料を見ることができ、貴重な経験になった。今が戦争体験者の生の声を聞くことのできるぎりぎりのタイミングで、歴史を資料に残すことは現代を見直すためにも必要である。第三に、研修中には一日の最後に先生の部屋に集まり、その日感じたことを共有する時間があった。様々な人とコミュニケーションを取る中で自分の当たり前を疑い、相手の立場を考える重要性を学んだ。研修は終わったが、この経験は新しいスタートとなることを確信している。(法文・1年)

・シンガポールには高学歴のエリートばかりが住んでいるとばかり思っていたが、高層ビルが並ぶ華やかな場所があり、富裕層がいる一方で、貧困層が集まりやすいゲイラン地区という場所も存在し、貧富の差を体感した。交流したシンガポールの学生の多くが「教育の問題とは何か。」という問いに対して、「ストレスだ。」と答えていた。子どもたちは、小・中・高校生に進学するときに受験を受ける。常に受験を視野に入れ、少しでも優秀な成績をとれるよう遊ぶ暇はないという話に驚きが隠せなかった。様々な民族が生活している多民族文化で、フードコートには、日本料理の他、中華料理、マレー料理、フィリピン料理など様々な料理の店が並んでいた。自分が知っている世界の中でだけで物事を考えるのではなく、世界を1つのまとまりとして捉え、その中に多種多様な文化、風習、生き方があるということを知ることができた。今までの自分にはなかった新たな考え方を得ることができて良かった。(法文・1年)

・様々な民族同士が上手く付き合い共生していると考えていたが、政府が管理しているという事実があることを学んだ。その民族の中でもヒエラルキーのようなものがあることは驚きだったが、歴史的に考えるとその関係が見えてくるものがあった。しかし、そこで納得して終わりではなく、多民族国家の中での民族の関係がなぜそのようなになったのか歴史とその背景をより深く知らなければならないと思った。研修全体を通して、自分の当たり前が一步外へ出ると当たり前ではないことを学んだ。今までは物事を表面上でしか判断していなかったため、その背景には何があるのか、自分にどう関係しているのかについて考える重要性を改めて学んだ。(法文・1年)

・シンガポール国立大学の学生を前にして教育についてのプレゼンテーションを行った。私は日本の教育の厳しさについて話したが、シンガポールでは小学校6年生で人生を左右するようなテストを受けるため、両親から定期テストの結果について怒られることが多いということを教わり、シンガポールの教育制度の方が厳しいのではないかと感じた。また、様々な社会的背景を持つ人々の存在を知った。ナショナルギャラリーで見た長編ビデオは、ヨーロッパで爆発的に出現した移民や難民危機についての作品であった。ギルマンバラックスでインタビューに答えてくださった方は売春婦やメイドについて調べていた。このように日本では身近に出会えないようなモノや人に出会った。さらに、シンガポールで初めて戦時中の日本軍による攻撃の被害を物語る資料や展示を見た。私はそれまで日本がシンガポールを含むアジア地域を占領していたことしか知らなかったが、初めて「占領」という言葉の本当の意味を学んだと思う。(法文・1年)

・学んだことは大きく分けて三つある。まず一つ目に自分の常識を世界の常識として捉えないということだ。これは先生が繰り返し伝えて下さった言葉であり、研修中もその言葉の意味を実感することができた。二つ目として、世界的に影響が広がっている新型コロナウイルス感染症に対しての日本の対応を外の視点から眺めるとともに、シンガポールの対応を目の当たりにできたということだ。三つ目として、大学生として私たちが果たすべき役割や求められる能力とは何かを再考することができたということだ。(法文・1年)

・国外から稼ぎに来て低賃金で働く労働者や家庭で雇われるメイドなど、労働の場だけでも様々な人間がいて、その国籍も様々であった。シンガポールではよりはっきりとそういった社会構造や人間関係が見えるように感じた。日本はそういった構造が見えにくい、または見て見ないふりをしているかもしれないとも思った。教科書では知り得ないような日本とシンガポールの歴史について学び、考え

た。歴史的展示物の中で私たちが多く目にしたのは、日本軍による占領期の記録だった。恥ずかしいことに私は研修前までそれらの事実についてほぼ無知だった。文字からでは得られない情報も含め、私たちは歴史を知る必要がある。学び、理解するだけでなく、そこからどう考えるか、どうやって自分に結びつけるかを考えることが必要であると感じた。(法文・1年)

・研修を通じて学んだことは三つある。第一に、日本軍が戦争時に日本国外でどのようなことをしたのか。博物館では731部隊についての展示もあった。日本政府が隠ぺいしていたことについては国外の方が詳しく知ることができるのかもしれない。第二に、シンガポールの教育についてだ。小学生から質の高い学校に通わせるために引っ越し人もいるほど教育に力を入れていることが分かった。しかし超高度教育の反面、学力や家庭の経済状況によって経済格差が生まれ、拡大する。貧しい家庭は子供を大学に通わせることが難しいため、貧困層から抜け出すことが難しくなる。第三に、文化的問題だ。他の国々に比べて建国からの歴史が浅く、伝統的な文化がない。そこで、新しい独自の文化を作ろうという国を挙げた動きが所々で見られた。シンガポールの状況や問題を知ることによって研修前とは違う観点で日本を見つめ直すことができた。海外に行くということは自分の見解を広げ、自分の中の当たり前、常識を覆すことだと思う。(工・1年)

・シンガポール国立大学の学生の方々との交流は刺激的であり、勉学への姿勢を省みる契機となった。研修期間中、ギルマンバラックスというアートギャラリーに2回訪れたが、移民や難民危機についての作品の真意を理解するためには、民族文化や宗教に関する知識を十分に持っている必要があると感じた。異文化理解のためには、語学力だけではなく、作品の歴史的背景や信仰にも関心を持つことが重要であると気づいた。また、ホーカーセンターで異国の料理を食べることは、日常的に異文化を体験することにつながり、非常に有意義な時間になった。研修中に2箇所の墓地を訪れたことで、私は教科書で取り上げられない事実を問題視しない自身の浅はかさを実感した。墓地を目の当たりにして初めて日本の歴史について学び直す必要があると感じた。(農・1年)

・研修で特に印象に残っているのは、日本がシンガポールを占領していた時代の状況である。私は小学生の頃から戦争について学習する機会をよく与えられていた。しかしシンガポールで目にしたのは「占領国」としての日本だった。今回の研修では日本にいたままでは実感できにくい、過去の日本の負の部分も知ることができて良かった。シンガポールは他民族・多文化国家であり、地域ごとに街の様子や空気感、店の様子がかなり異なっていて非常に面白かった。(農・1年)

・日本とは異なる文化や価値観を体験することが出来ただけでなく、学生交流や企業訪問に参加することで自分の考えの未熟さや無知を実感した。特に印象に残ったことは言語についてである。シンガポールの公用語は英語であり、学生は学校では国語の授業を英語で行う。しかし、その他にもマレー語、華語、タミル語などの自分の民族の言語も学ばなくてはいけないことを初めて知った。シンガポール国立大学で行われた学生交流では温かく歓迎してもらい、勉強だけでなくお互いの生活や趣味など様々なことについて話し合うことが出来た。将来の夢や学びたい内容が明確であるだけでなく、学生は自分自身のために英語や日本語などの様々な言語の勉強をしていることを知った。(農・1年)

・今まで日本にいる時には考えたこともなかったような物事について考える機会が多かった。シンガポールはそのアイデンティティを失った都市になることを恐れ、芸術面に力を入れていた。日本には古くから受け継がれてきた文化がたくさんある。高度経済成長を経てもなお、それらは失われることなく、人々の間で大切にされている。当たりのことのようにだが、これは大切なことではないかと考えた。また、この研修では、多くの戦跡を巡ったり、性というものと向き合っている人のお話を伺ったりしたことで、今まで目を向けてこなかったところにも考えるべきことが山ほどあるということが分かった。(農・1年)

・研修中に五洋建設に訪問してお話を伺う機会があった。汗を流さないシンガポール人に代わってその他の民族の人が現場での作業を行っているという鹿児島大学工学部出身の2名の方が説明して下さった。昔は民族間で諍いがあったが、今はいさかきを起すすと国外追放になるということだった。多文化の共生には、しっかりした法整備が必要なのだと思う。さらに、人種差別について新たに学んだことがある。シンガポール国立大学の学生が、日本での旅行中日本語を話した時、よく「上手だね。」と言われることにとっても違和感があったとおっしゃっていた。カジュアルな人種差別とも言っ

ていた。確かに「あなたは違う国の人だ」ということを強調しているようにも思えることが分かった。(農・1年)

・世界には様々な考えを持ち、立場の違う人間がいて、良くも悪くも関わり合いながら生きて、今があるのだということを学んだ。人々が様々な文化や民族について学び、異なる文化であっても一緒にお祝いや交流を行うために集合住宅の一階を吹き抜けにするなど、国全体で様々な取り組みが行われていることを現地の大学生から教えてもらった。シンガポールをよりよくするには、人に優しくする、差別の生み出すステレオタイプを取り除く、誰かを傷つけていないかその人の立場に立って確かめ、自分の態度を考えることが必要で大切だとおっしゃっていた。この素敵な国でも社会問題が複雑に絡み合っている存在し、その中で理不尽だろうと必死に生きている人々を多く見た。しかしこれは私の住んでいる日本でも同じことが言えるのではないかと気づいた。一度日本から出たことで、比較の対象を得て、日本を見つめ直すことができた。これもこの研修で得ることができた成果である。(農・1年)

・私がこの研修で考えさせられたことの一つとして「他民族との共存」が挙げられる。異なる民族、文化が共存するのは簡単なことではない。もちろんシンガポールが異民族同士の共存を問題なく成し遂げられているというわけではない。今回初めてシンガポールを訪れ、明らかに民族によって職種が固定されていることに気付いた。その結果、民族によって貧富の差が現れており、この固定化された社会構造の中では子供たちの未来が狭められてしまうのではないかと考えた。この研修を通じ、みんなが過ごしやすい社会を築くためには他民族の理解だけでは足りないということに気が付いた。他民族を超えて「一人ひとり」を尊重・理解していかなければならないと思った。そもそも一人ひとりの個性・生活は多様であり、自分と同じ人は存在しない。社会全体が「多様性」に対して寛容になるには、一人ひとりが他人との違いに目を向け、一人ひとりの生活を重視する必要がある。私はこれから上辺だけでなく、本当の意味で「多様性が認められた社会」になってほしいと思う。(工・2年)

▼シンガポール国立大学にて



▼克蘭ジ戦没者慰霊碑前にて

